

「わが家のアイドル」

くらよししりつやしろしょうがっこう ねん 倉吉市立社小学校 4年

たなか まひろ 田中 万絢

「チビちゃん、おまたせ。来たよ。」

私が一年生の時に生まれた牛のチビは、とても小さくて、ぬいぐるみのようだったので、そう呼んでいました。私は、チビにほ乳びんでミルクやえさをあげるお手伝いをしながら、お世話をするのが好きでした。チビは、ミルクやえさをあげるうちに、私を見たらついてきて、さくから顔を出して来るようになりました。近づきすぎて、大きな舌でなめられることもあったけど、かわいくてたまりませんでした。チビはえさをモリモリ食べて、あっという間に私より大きくなりました。私の家は、らく農をしていて、6カ月たつと放牧場へ上がり、出産が近くなるとまたわが家に帰ってきます。チビが行ってしまう時は、少しさみしくなったけど、今度はお腹の赤ちゃんと一緒に帰ってくると思うと、その時が待ち遠しくなりました。

チビが放牧場から帰って来る日、私は学校から帰ってからすぐに、ランドセルを置いて、牛舎に走って行きました。チビを見てすぐ、「チビっ。チビっ。チビちゃん。おかえり。」と、声をかけました。チビは覚えていないかなと思ったけど、私の方に近づいて、さくから顔を出してきました。チビが小さかった時のように、そっと顔をなでてあげました。お腹がふっくらして、体も大きくなってたけど、チビの顔や体のもようを覚えていたので、すぐにチビだと分かりました。私を覚えていて、顔をなでさせてくれたのかなと思うと、とてもうれしかったです。

いよいよ、チビが出産する時、私は、はなれた所で静かに待つことにしました。でも、チビが苦しそうにうなり声を上げたので、チビ大丈夫かな。元気に赤ちゃん生まれるかな。と、心配になりました。チビのおしりから、赤ちゃんの前足が二本見えて、ロープで前足を結ぶと、祖父が、「順調だよ。ゆっくりゆっくりひっぱるよ。せえの。せえの。」

と、声をかけました。祖父と父がロープをひっぱって、チビの出産を助けてあげると、ヌルヌルっと赤ちゃんが出てきました。祖母と母がタオルで子牛の顔や体をふいてあげると、子牛が顔を起こした

ので、私はほっとしました。チビはつかれているようだったけど、しばらくすると、子牛を見つけて、何度も何度も体をなめてきれいにしてあげていました。子牛を見ると、顔ともようがチビとそっくりだったので、チビ子と名付けました。

祖母から、チビが、がんばってたくさんの牛乳を出してくれていると教えてくれました。また、祖父からは、子牛の時からかわいがっている牛は、成牛になってからも、人なつこく、大人しい牛が多いと聞きました。私は、今日も明日も、子牛にたくさんの愛情をそそいで育てたいと思います。